

庄野潤三論(四) — 『ガンビア滞在記』をめぐって—

A Study of SHONO Junzo(4): Gambia Taizaiki

鷺 只 雄

Tadao SAGI

一

前号では、昭和三十一年(一九五六)までに発表された作品について論じたので、今回は三十二年以後の作品をとりあげることにした。

「独身」(昭32・2「小説公園」 単行本・全集未収録。以下、単・全未収と略す)は私小説で、氏の父君は帝塚山学園の校長としてその創設から発展に尽力し、一代で今日の巨大な学園の基礎を築いた人であるが、その父に「第二の天職」(「独身」)。以下、誤解のおそれがない限り、引用文についてのこのような注記は省略)として仲人があり、学園の卒業生のみならず、知人で未婚の人間を常にどう組み合わせるかを考えていて、庄野家は兄弟六人全員「父の手

にかかって片付けられた」が、次兄の友人だけは何年かかっても結婚させられず、到頭父の急死によってかなわなかった顛末をユーモラスに語り、次の「父」(昭32・6「文学界」 単行本未収・全集3収録。以下、単未収・全3収と略す)もまた同じく、その性癖、性格としては専制的な家長型で子供たちに対する期待像があつて、社会人となった人間は趣味が必要であり、しかもそれによって周囲から重んじられるようなものをとということで兄妹全員(その妻も)謡の稽古をさせられるが、閉口して一人抜け、二人抜けしてゆく過程を巧みに語って笑わせる。庄野氏はよく笑いや笑いの文学が好きだと語るが、この二作はその好例である。

「ある町」(昭32・2「群像」 単・全未収)は「まともな家庭」の余りの少なさに、却つてその存在を疑うという氏には数少ない観念的な操作の作品。「自由な散歩」(昭32・7「小説新潮」 単・全

未収)は安原の会社がつぶれて妻がピアノで一家三人の家計を支えている日常を描き、「私のパタシユ」(昭32・8「新女苑」 単・全未収)はトリスタン・ドレエムの「少年パタシユ」のように「可愛らしい、機知と空想力」に富んだ娘「小三のなつめ(モデルは長女の夏子)」を描いている。これらの中、とりわけ重いのは「相客」(昭32・10「群像」 単・全3収)で、敗戦後復員してから戦犯容疑(捕虜虐待)で拘引される次兄に同行した時の経験(大阪から東京まで列車で連行された)から、人生ではめぐり合わせの悪い人間、ツキのない人間というのがあってそういう人間は何かすると貧乏くじを引いてしまう事に対する無限の悲しみを述べて哀切である。

詳しくは後で述べるが、庄野氏はこの年、昭和三十三年の八月から翌年八月までの一年間アメリカ、オハイオ州のケニオン大学に留学している。そのため、三十三年に発表した小説は私の調査した限りでは以上の七作であり、三十三年の発表作は「五人の男」(昭33・12「群像」 単・全3収)と「イタリア風」(昭33・12「文学界」 単・全3収)の二作であり、それ以外のエッセイ類はこの二年分をまとめて記すと次の通り(インタビューも含めた)。

- 昭32・1・19 書き下ろし長篇小説二つ 「凶書新聞」
 5・30 私の取材法 「産経時事」
 6 誤植—人のことは言えない 「群像」
 8 翻訳モノいろいろ—「アウトサイダー」他 「婦人朝日」
 9 井上靖著『射程』 「群像」

昭33・1 万聖節のころ—私のアメリカ便り「新女苑」

8・14 <インタビュー> アメリカから帰った庄野潤三氏 「産経時事」

9・25 四対一(オハイオ州ガンビアの話) 「洋酒天国」29号

10 ガンビアの虫 「新刊ニュース」

11 趣味について 「茶の間」18号

11・30 解説—藤沢桓夫『花粉』 角川文庫『花粉』

12 アメリカン・ハズバンド—私の夫婦アメリカ留学記 「婦人公論」

12 二つの絵葉書 「温泉」

12・1 吉行著『男と女の子』・安岡著『二つの顔』 「週刊読書人」

以上が私の調査した範囲でのエッセイ類である。三十三年十二月に発表の二つの小説は帰国後に書かれたものと思われるが、「五人の男」はスケッチした五人の男から「作者の孤独」といつても、どの男の心の底にもある孤独だが、を象徴的に浮き上がらせ、ものと見られるが、既に白井吉見や山本健吉の指摘もあるように延々第五話までつらねる必要があったかについては疑問が残るといわざるをえない。「イタリア風」は日本で知り合ったイタリア系アメリカ人とニューヨークで再会してその自宅に招かれた時の印象を記したものだ、アンジェリーニは美しい夫人とは既に別居し、離婚寸前で、家庭は父も妹もてんでんばらばらで、彼の荒廃した孤独な内面が直にうかがえる佳品。

先にもふれたが、庄野氏は昭和三十二年八月二十六日にアメリカの客船クリーブランド号で横浜を出帆して千寿子夫人とアメリカに向かい、オハイオ州ガンビアのケニオン大学で一年間生活し、翌年八月十一日に帰国したのであるが、この一年間のアメリカ生活はその後の氏の生と文学とを考える上ではかりしれない大きな影響を与えたと言ふことができる。

当時、アメリカのロックフェラー財団は作家や評論家を一年間海外に派遣し、外国の思想と生活になじんでもらうという制度を始めていて、氏の行く前年は阿川弘之氏であったが、その時から夫人同伴が条件となった。アメリカの社会では男一人というのは人間の半分ではない。彼の好き^{ベター・パートナー}な伴侶があつてはじめて一人前になるといふ考えからである。日本人の選考・推薦にあつたのは坂西志保³でもう一人財団の責任者である人文科学部長ファーズ博士は日本史の専門研究者でもあり、この両氏に麻布の国際文化会館や坂西氏の大磯の御宅であつて話を詰め、大略次のように話が決まつた。

財団に提出した研究課題は *Fundamental thought of family life in the United States* (アメリカの家庭生活における基本的な考え方)。留学先はファーズ博士が庄野氏から希望を聞き、二つの候補地をあげ、その中からオハイオ州ガンビア(発音はギャンビアであるが、庄野氏はこの方が日本人の読者には「落着きがある」だろうからとしてこう表記した旨ことわっている⁵)を選んでくれた。ちなみに、もう一つの候補地はミネソタ州のカールトン・カレッジであつた。

当時氏には小学生の長女(昭22年10月生まれ)、幼稚園の長男(26年9月生まれ)、31年2月に生まれた二男の三児が居たので、幼児を置いて夫婦で行くには抵抗があつたが、幸い近所にお手伝いの娘さんが見つかり、また夫人の母が関西から上京して世話をしてくれることになつて解決した。

ガンビアのケニオン大学に決定するについては庄野氏からの希望として「田舎の小さな町へ行つて、そこで町の人と同じようにして暮りたい。そうして、みんながどんな風に生活しているかをよく見たい。」という申出があり、それに添つてガンビアが選ばれた。

それにしてもガンビアは途方もない田舎であつた。氏は地図帳という地図帳を探したがアメリカへ出発するまでに遂にそこを記した地図を発見することができなかったという。アメリカでは電話帳に辛うじて、人工六百、戸数二百と記されている由だが、六百のうち、五百はケニオン大学の学生で、残りが教職員と村人ということになる。

但し、ケニオンからはニュークリティシズム(新批評)を提唱して世界に知られた文芸評論誌「ケニオン・レビュー」が刊行されていて、それを主宰するジョン・クロウ・ランサム氏が教授としてあり、しかも氏は庄野氏の身元引受保証人であり、更に庄野氏は幸運にも氏の定年一年前の最後の講筵に列することができたし、ランサム氏からよく自宅に招待されてテレビで一緒にフットボールや西部劇を観た⁸という。ちなみに、一言付言すれば氏は留学生ではなく、作家としてアメリカの観察者として滞在したので大学の授業を聴講することは出来るが、それは義務ではなかつた。ただし、氏は前期は週二回ランサム教授の「詩入門」と、後期はサトクリップ教授の

「悲劇の研究」の演習を聴講（「砂金」昭49・1「群像」）したが、「予想したとおり、さっぱり分らない。ところどころ、何を言っているのか分る。」というのが最初の状態であったようだ。誤解のないように、念の為に言っておくと日常生活において言葉が通じにくかったということではない。そのために困ったというようなことはなかった。ただし、大学の講義というような予備知識の全くない、いきなり新知見の連続という場合には困ったという意味である。

ところで、ガンビアは氏の希望にぴったりの町であった。しかし実際にそこを訪れての印象を率直に言えば、「とはいうものの、最初のうちはこの淋しいところでいったいどうやって日を送ったものだろうと心細く思わないわけにはゆかなかった。」と記すように、流石の庄野氏もガンビアの人気のなき、田舎としての草深さには度肝を抜かれたようである。

しかし、結果として氏はさほど淋しい思いはせずにガンビアの一年を送ることができたのにはいかなる事情があったのであろうか。どうしてそういうことが可能であったのだろうか。

「九月に始まって六月に終るカレッジの一年と町の様子を書いた」「ガンビア滞在記」の分析を通して、これらの問題の他「ガンビア滞在記」は以後の作品の出発点とされる評が多いのだが、その理由はどこにあるのか、またこれ以後、それまでの短篇作家から、中・長篇作家へと変貌するについてはいかなる事情、あるいは理由があったのであろうか、というような問題についても考えてみることにしたい。

庄野氏のアメリカ招聘についての財政的支援の具体的な内容については数字をあげて説明したものはないので詳細は不明であるが、財団への推薦人である坂西志保の記すところによれば「客員の教授待遇」であったという。

しかし、このアメリカに行く際に支給された往復の旅費はかなり窮屈なものであった。そのことはアメリカ行き船内で知り合い、万事相談し、何事にも親切に応待してくれて、後にポストンで再会し、カナダ旅行にも誘ってくれたウインターステーション氏が、ガンビアに無事到着の庄野氏の手紙に対して「お手紙有難うございました。私たちはあなた達がガンビアに無事に、そしてお金がなくならないうちに到着されたことを知ってほっとしました。」¹²という言葉にはつきり示されているであろう。

そこにはかいつまんで言うところの事情があった。サンフランシスコ到着を目前にして氏は給仕のジョーと船室係のノビッキートにチップを十五ドル宛やりたいと思っただが、氏の日程サンフランシスコ→ロサンゼルス→グランドキャニオン→シカゴ→ガンビアからすると、「どうも旅費がぎりぎりではないかということに気が付き」、無駄使いたこと「ハワイでオアフ島一周に夫婦で二十五ドル使い、船内新聞の予約に十二・五ドル使ったことが後悔されるが、今更どうにもならず、ウインターステーション氏に相談する」と氏は紙と鉛筆を出して旅程と費用とを細かく検討してくれた。その結果、氏の計算によれば、案の定庄野氏の心配は的中し、もし二人に十五ドル宛チップをやると、庄野夫妻がガンビアに着い

た時には手許に僅か十ドルしか残らないことがわかって困惑した。ウインタースティン氏は船のチップは一人七ドル宛にしてはどうかと言ってくれたが、彼らの親切な世話を思うとそれもできないので、結局氏は旅行中のホテルは出来るだけ安い部屋にし、食事も切りつめ、汽車の中では食堂車は使わずに食料を持ち込んでガンビアまで辿り着こうという悲壮な決心をしたということがあったからである。

ここで問題にされている船の係りへのチップを十五ドルにするか、その半額にするかに端を発し、オアフ島一周の代金二十五ドル、新聞代十二・五ドル支払ったのを無駄使いとして後悔するというのは、余りにもみみっちい話で、公憤を禁じえない。

成心なしに率直に言えば、氏を招聘したロックフェラー財団の好意・善意に疑う余地はないけれども、しかしながら戦後十二年の時点での戦勝国アメリカの日本人招待における待遇処遇の面では、庄野氏の困惑・窮境に見られるようにそこにはこの程度でよしとする蔑視的な見切り、あるいは思い上がりがあったことは否定できないのではないであろうか。すくなくとも、彼らは招聘された日本人が招聘先へ到着するまでにこれ程の煩悶・心労をしていたことなどは夢にも想像していないことだけは確かであろう。

もう一つ、氏がガンビアに滞在中毎日書いていた日記についてふれておきたい。

大学の教員宿舎である「白塗りバラック」(平屋で三世帯が住めるようになっていた)の中には、窓に向って小さな机があり、質素な椅子もついていたので、毎日そこに座らせてせと前の日にあったこと、その日のことを詳しく書きとめた。それがぶあついアメリカ

カの大学ノート八冊になった。

午前中Aが来て、何を言って、午後B宅に招待されて……と、偏見なしに観察したことを忠実にメモしてきました。最後には手首が痛くなって、何にも書くことのない日を願ったくらい。これが小説になるかどうかは、まだわからないが、一冊の部厚い本にまとめた。

そしてアメリカとは一言で言えば云々と言う形ではなく、あるアメリカ人を描くことでアメリカを考えたいと思っています。¹⁴

氏が日記に書く場合に最も注意したことは相手が「話したことをなるべくそのまま書くことにした」ことで、「親切にしてくれた」という風に概括しないで、相手の言った言葉で、そのまま書くようにしたことである。「そこで自分は毎日を記録しながら同時に、文学にとつて大事な訓練を続けていたことになる」と記すのであるが、実際ガンビアでの一年間の滞在は、この『ガンビア滞在記』の他に、その続篇となる『シェリー酒と楓の葉』(昭53・11・15 文芸春秋)、『ガンビアの春』(昭55・4・30 河出書房新社)、『懐しきオハイオ』(平3・9・25 文芸春秋)と、合計すると四冊の著書を生み出したばかりでなく、多くのエッセイ他を捻らせた肥沃な沃野であり、更に昭和五十三(一九七八)年四月にはケニオン大学から、その著書によって大学とガンビアを広く世に知らせた功績によって名誉学位を授与され、その記念式典に夫妻で招かれて二十年ぶりにガンビアを再訪して旧知の人々と再会するという機会にも恵まれて、ガンビアはそれ以後の庄野氏の文学と人生にとってはか

りしれない影響を与え続けているのである。

後に詳しくは再説することになると思われるが、あらかじめ指摘しておけば、この作品に記されていることはアメリカの草深い田舎の大学町での日常生活が断片的に描かれているだけである。それらはとりとめのないものであるゆえに、書きとめられなければ一瞬の記憶にもとどめられず、うたかたの如く消え去ってしまうものである。

しかし、その平穩無事な日常生活の些事が詩人の目によって選ばれ、記録されることによって記録の面白さが生まれ、些事と思われたものが永遠へと転化するのだ。

言いかえれば、この作品にはガンビアという地名が与えられているが、殆どの地図にはその名が記されていないところからすれば、アメリカ人でもそれを知らないというわけであって、無理にアメリカに限定する必要はない。

また、前引の文章で大学ノート八冊をもとに「アメリカとは一言で言えば云々と言う形でなく、あるアメリカ人を描くことでアメリカを考えたいと思っています。」と抱負を語っているが、「ガンビア滞在記」をみれば明らかのように、作中最も親交を結んだのは政治学客員講師のミノーであって、彼はインド人であってアメリカ人ではなく、市民権も未だ取っていない。

畢竟これらの事が語るところは、この作品がアメリカのガンビアという、一つの国、一つの町に限定されるのではなく、時と処とを超えているいろいろな国の人々―インド人・ポーランド人・ドイツ人・フランス人・メキシコ人・イタリア人等々―が交わり、リスやラックーンやスノードロップと共生しているという不易の要素で構成さ

れている故に、発表後約半世紀を経た今日なお瑞々しい香気を放っているということになるのであろう。

四

町の話は何から始めるか迷った末に、「一 オハイオ州ガンビア」を通りで電線の上を渡るリスを見て、そこから始める。次いで「二 郵便局」の紹介に移り、ここでは郵便物を配達せず、各自がボックスをもって毎日郵便物を取りに行く。ただし、速達便が来た時だけ、家まで届けてくれる。

次いで四人の職員紹介となり、局長は小柄で人の好きそうな爺さんで始めは臨時のパートかと思つた程。逆に一見局長風に見える男は背が高く、いかめしく見えたが何度も顔を合わせるうちに親しくなつた。三人目は名前を知つていてホーマーというが、少し足を曳く。最初氏は、独身で足の悪い、陰気でいじけた青年とばかり思つていたところ、それはとんでもない誤解であることがサトクリフ教授に連れられてこの家に行つてわかつた。ホーマーには父譲りのかなりの広さの農園があり、妻と学校に行く二人の男の子があり、八十頭の羊と四頭の豚を飼つて、勤めに出ない日は農園の仕事をし、健康に意欲的に暮らしている。

四人目は若い娘だが太つていていつも大儀そうにしていて、私達宛の郵便物がない時にはすまなそうに首を振つた。

局長室には壁画があつて、ケニオン大学の創立者フィランダー・チェイス氏が丘の上で馬上からのちにキャンパスとなる敷地を卜しているところで、この絵は後年カレッジの美術教授が描いたものだ

という。

チェイス氏はかねて牧師を養成するためのカレッジの敷地を求めていたが、適当な土地を得られなかった。ところが所用でマウン・ト・ヴァーノンまで来た時、狩猟に誘われてこの地に赴き、理想的な丘陵があるのを見て即座にここにカレッジの建設を決めて土地を買い取る交渉を開始。一方、渡英して非常な苦心の末に必要な資金をかき集めた。一八二七年に起工され、二九年に完成されたのが最初の建物で町名のガンビアも、校名のケニオンもチェイス氏の最も有力な支援者であった二人のイギリス人貴族の名前からとったものという。

チェイス氏の人となりについても少し付言すると、両親は開拓者で、男ばかり十四人兄弟の末子に生まれ、幼年時代には歩くよりも馬の方が容易という男の子であったらしい。父や大勢の兄たちがしていることを赤ん坊の時から見えて育ったので何でも自分でやれる人間として成長した。

そのため彼は非常に頑固で、人の意見や指図を嫌った。のちに、カレッジも牧師養成に縛られず、広く人間としての教養を教えるように変更したので教会から非難がおこり、また教授たちは学校のことは教授会の議決によって決めたいと言いだしたりしたのに業をいやして、自分の考えをいちいちみんなに同意を求めないと出来ないような総長ならよしたほうがましだと言ってやめてしまった。従ってその晩年は淋しく、気の毒なものであった。

ところで作者は町の説明が中途ながらと言って最初に知合った隣人として「三 ミノーとジューン」の紹介をささむ。ミノーはボンベイで生まれたインド人で色は浅黒い程度で黒くない。両親共にイ

ギリスで生まれるか、あるいは学校教育をイギリスで受けた人で、ミノー自身も小学校入学まで英語で育った。シカゴ近くのノースウエスタン大留学中に知合ったジューン（イリノイ州出身）と二年前に結婚し、長女シリーン（オムツをつけた赤ん坊）がいる。今年（昭和32年）一月からケニオンで政治学を教えている。最初は気難しそうな印象であったが、庄野氏とは家が道路を隔てた向かい側と言うこともあって、一と月もたつ頃にはうちとけて日に何度となく気安く行き来するようになった。

彼の特徴は端倪すべからざる警句や冗句を発すること、「アメリカ人が米を料理することを知らないのは不幸だ」、あるいは庄野夫妻に結婚式のアルバムを見せていたジューンが更に新婚旅行の写真を見せようかというのをさえぎって「写真は写した人間には興味があるが、見せられる方の人間には退屈なものだ。もうその位で十分だ」、また「ガンビアでは五人も妊娠している奥さんがいる。ガブリエラ（ワインバーグ夫人）が二人目。ミセス・グレアムも二人目。ミセス・リッチスンが一人目。クロイツ氏のところでは何と五人目が六月の末に生まれるそうだ」と云ってから、「肥沃なるガンビア」と云って笑ったというぐあいである。

一方、妻のジューンはアメリカ人らしく開放的で純真だが、アメリカ人には珍しく性質が優しく、控えめなのに対して、ミノーのほうが依怙地で専制的で独断的なため―特に彼はパーティやダンスなどの社交的な場は嫌って出なかつたり、ゴネたりするのでジューンは一人で出かけることが多く苦労している。

また、町の紹介にもどって「四 ガンビアの動物」ではラッキー（あらいぐま）との散歩中の出会いから始めて、その習性、さま

ざまのエピソードの聞書を集めて一章とし、自然と動物とが一体と
なっている町の姿を描く。

「五 『村の宿屋』とドロシイズ・ランチ」ではガンビアにある
二軒の食堂を紹介する。

両者は対照的で、前者は立派なレストランで、ケニオンの教授を
始め、ケニオンの訪問客は皆ここで食事をし、庄野氏も最初そうし
た。壁には絵が飾ってあり、一カ月位でかけかえる。マウント・
ヴァーノンの町からもドライブがてら食事にくる。氏は到着してか
ら二日間、三食続けて食べたら飽きが来てゆかなくなった。料理人
を入れて三人の女が給仕として働いているが、いずれも若いのかそ
うではないのか見当がつかぬ顔立ちで、そろって無口。家庭持ちか
独身かはわからない。二階には部屋が沢山あって妻帯している学生
に貸しているので夫婦は客が来ない日でもゆったり暮らせているの
だともいわれている。

一方、ドロシイズ・ランチは大衆食堂兼居酒屋といった感じで、
何の「取り澄ました感じ」もなく、「気楽な店」で労働者とお金の
ない学生たちの来る所でそこが氏の気に入ったようだ。

一回目に訪ねた時は休業日であったが、主人のラットレイ老人は
店の中を案内してくれた。老人の話すところによれば、スコットラ
ンド生まれで、石工になり、二十五の時にアメリカに来てボス（親
方）として五十年間働いた。最後の仕事はオールド・ケニオンが火
事で焼けたのを、もう一度元通りに再建した時だ。ドロシイズとはそ
の時に結婚して、ガンビアで暮らすようになった。ドロシイズは再婚
だが、初婚の夫は働かずに飲むばかり、他の女には手を出し、家に
は帰ってこないという性悪であったらしい。庄野氏が二度目に行っ

た時にドロシイズとまちがえ挨拶したが、それはセーラという若い女
で、ドロシイズは「少し取っつきが悪いように見える女」であった。

三度目に行った時には午後三時頃であったが、カウンタで二人
の若い男と、主婦らしい二人の女がトーンイードとサイクロンを
話題に飽きもせず盛り上がっていた。四度目に行った時は夕方、
セーラは一人のみすぼらしい服を着た、酔っている男に「家に帰り
なさい。あなたの最良の場所は家です」と促すが、一向にきかな
い。それで根負けをしてワインとビールを紙袋に包んでツケにして
持たせて帰した。セーラの言うところでは、ココーシング川の岸辺
にかたまつて住んでいる者たちの一人で、ガンビアの農園へ仕事に
来ているという。ミノーに話すと、彼等は南部のヒル・ヴィレッジ
から十年ほど前に移つて来てあそこに住みついたといわれ、そのヒ
ル・ヴィレッジというのは一般の社会とは隔絶したところでひどい
暮らしをしている人たちのことだ。

彼等は掘立小屋のような家を建て、ぼろぼろの服を着て住み、欲
しいのはテレビと車と酒の三つで、それ以外のことは全くかまわ
ない。普通の人がいやがる仕事を引き受け、たとえばどぶ浚いを一
日せつせとやつて、かりに十ドル稼いだとすると、それがなくなる
まで三日でも四日でも飲み続ける。しかし、子供が大きくなって学
校へ行くようになると、今の生活は変えざるをえないだろうとミ
ノーは言う。

その次、五回目に行った時にラットレイ老人に会った（二度目）。
夕飯代わりのミルクシェーキを飲みながら、今は胃をやられてもう
肉もウイスキーもビールもだめだ。代わりに、朝はオートミール、
昼と夜はミルクシェーキ。十四の時から石工として働き出したから

飲み始めたのは早かった。何でも飲んで、何でもうまかった。

庄野夫人に、料理は出来るかと尋ね、出来ると聞くと、うんとうまいものをこしらえて彼を大きくしてやりなさい、と小学生に對するようなはげましかたをした。また、氏を近くにいた男に紹介し、一回聞いただけでは覚えにくいと言ったのに対して、そんなことはない。わしは一度会ったら二度目にはその人間の名前を言える。ラテン語の諺に「記憶することは知ることにはまさる」とあるが、その通りだ、と老人は元氣そうに話した。

「六 結婚式の写真」では十月十六日の夕方にミノーがシェリーを飲みに誘ってくれたので夫妻で行く。ミノーの話によると、ガンビアではスコッチは高いので国産のバーボンにし、これは一本三・五ドル前後。シェリーはニューヨーク・テイラーが最上だが、これも高いので九十七セントのペトリにする。しかし「味は感心しない」とミノーが言う通り、グラスに二杯以上はとても飲めない。それを飲みながら結婚式の写真を見せてもらう。

結婚式はジューンの生家のあるイリノイ州ウエインの町（人口五百人程）の教会であり、いかにも幸福そうに輝いているジューンを指してミノーが「ジューンの表情を見る。勝利者の喜びを示している。競争に勝って遂に私を獲得した瞬間だ」と言うが、そういう彼自身「ジューンに負けず嬉しそう」にしている。披露パーティの季節は六月、彼女の家の庭で昼間、二百人の客があつたという。アメリカの男の友人達は結婚式でいろいろないたずらをするが、それらを紹介したあとで、二人はうまくまいて難を逃れ、花嫁の家で一週間家族と暮した後、イギリス廻りでインドへの新婚旅行に出発した。そちらもジューンは見せようとしたが、前述したようにミノー

に（写真を写した人間にはおもしろいが、見せられる方には退屈だから、それで十分）と言われてストップされた。

五

以上は「ガンビア滞在記」全三十五章から成るこの作品の一章から六章までの梗概を記したものだ、そこに見られるこの作品の特徴について以下に考えてみたい。

第一に指摘されるのは緑あふれる自然の中にあるおちついた静かな生活ということであろう。

作品のオープニングはリスが町の中を走りまわっている場面から始まって、ラストは家の出入口の灌木の茂みに小鳥が巣を作つて雛が生まれている処で終り、その間に「四 ガンビアの動物」が描くように、日本の狸に似たラックーン（あらいぐま）にいたく作者は好奇心をひかれたようで、その性癖と行動、エピソードを丹念に収集している。他の動物で印象的なものとしては兎がある。

散歩は後に氏の代表的な日課として有名だが、それは帰国して東京石神井の家から、神奈川生田の地に引越してから後のようで、この時点ではまだ散歩に左程執心してはいなかったようである。その代わり、大学のスポーツの観戦や応援にはせっせと出かけていたようで、「ガンビア滞在記」には「ガンビアのスポーツ」として一章（三章まで設けてフットボール（いつも負けている）・水泳（一番強く、オハイオ州でたびたび優勝している）・テニス（比較的強い。ついでに言えば庄野氏がガンビアで実際に御自身がされたのはテニスだけのようである）・サッカー（フットボールよりは強

い)・野球(弱い)について詳述している。

次に指摘しなければならぬのは、生活上必要な店の紹介として郵便局と食堂の例をあげて店のみならず、そこに勤めている人々の詳細な身許調べまでを記している点である。店の運営上、オーナーや店長の性格・資質・性癖などが店員にも影響するところが無いとは言えないから、トップの性格等について云々することは了解できるが、しかしそれが店員にまで及ぶことは何故必要なのであろうか。

その点について作品は何らの説明もしないのであるが、実はこの点についてはその後に出てくる「八 ブラウン氏の銀行」、「十一 ヘイズ食料品とウィルソン食料品店」でも全く同様になされるのである。

前者の正式の名称は「ピープルズ・バンク」だが、氏は「ブラウン氏の銀行」のように見えるとして、その所以を次のように記す。

氏は第一に赤ら顔で、太った精力家であり、第二に仕事の虫であり、夜も灯りがついていて仕事をしているようだ。これは想像だがとして、銀行も自宅も同じで、夕食後も一度は出かけてゆくのではないか、その点で普通の勤め人とは勤め先への感覚、ロイヤリティが異なっているのではないか、その証拠に床屋でも食料品店でも一度店を閉めて自宅へ帰ったら二度と出て来はしない。第三にこれはミノーの話だがとことわって二十数年前にあった銀行強盗事件——二人組のピストル強盗が押し入った時、氏は勇敢にも応戦したが賊に銃を撃ち落され、彼らはブラウン氏を人質に車で逃走、一命が危うかったが勇敢な人が一人追跡したのに慌てて賊はブラウン氏を車から突き落としたので助かり、氏の行動は責任感旺盛な、勇敢な行為

として賞讃されたということがある。これに類する話に数年前、二人の学生がいたずらに夜、銀行の入口で「金がほしい」と大声で叫ぶと、とたんにブラウン氏は入口めがけて滅茶苦茶に乱射し、幸い怪我はなかったが、それを聞いて庄野氏は夜、銀行の傍を酔って通つてもブラウン氏の机の中には常にピストルがある事を夢忘れてはならぬと肝に銘じたという。

こういうと氏は「無鉄砲」と思われるかも知れぬがその反対で、礼儀正しく、常に「ハウ・アー・ユー？」と尋ね、こちらも応答して氏の「よろしい」を聞くと「本当によろしい気持になる。」、そういう一種の人格的マグネティズムとでもいうべきものが氏にはある。

ただし、一つだけ氏の前で口に出してはいけない禁句があつて、それは天気の悪口だ。

たとえ、雨や雪が降つていてもそう言つてはいけない。氏が怒るからである。ミノーが雪の日に銀行へ行き、ついうっかり「今日は大変寒い」と言つたとたんブラウン氏から大きく響く「ビューティフル・デイ」という言葉が返つてきたという例には事欠かないからである。

最後に銀行に勤めている太った娘についてももしかしたら(一)郵便局に勤めている娘と姉妹ではないか、(二)姉妹だとすると、同じく太っていないが与える印象がこうも違う——一方は美しく快活に、一方は物憂く、不活発な印象を与える娘になったについては周囲の思惑からそうだったのではないかと想像するが、それが的中して姉妹であつたことが判明する。

後者の「ヘイズ食料品店」と「ウィルソン食料品店」の場合にはあたかも両店の比較研究報告書の観があるといってもよさそうである。

スペースの都合もあるので具体的な既述の紹介は省略するが、項目として主要なものを紹介すると、店主の接客態度・働きぶり・顔の表情・年令・店員の挙措応待・未婚か既婚かの確認から家族、夫の仕事の内容まで紹介・客層の相違・客数・開店の歴史の差・店名の相違から扱う商品の種類の違いにまで及んでいる。

このように「ガンビア滞在記」にはそこで暮らした郵便局と局長以下の局員、二つの食堂と店主以下の人々とさまざまな来客、銀行の店長と行員、二つの食料品店の店主と店員について、それぞれ一章ずつ設けて詳細丁寧に記し、特にその人物についての既述は詳細であり、また人間臭いものなのであるが、この詳細な人間臭い身許調べは何故必要であったのだろうか。

また、右の登場人物は勿論、作品に登場する人物全てに対してやさしい視線がそそがれ、やわらかなまなざしで見守られているのであるが、これは何故なのであるか。特に後者の問題は「悪人は登場しない」庄野文学とまっすぐにつながる重要な問題であると思われる。

これらの問題を考える上で示唆的なのは「二郵便局」の巧みな構成である。

二章は全集の頁数で言えば、約五・五頁、そのうち約二頁は郵便局の既述で、残りの約三・五頁は創立者チェイス氏を中心にしたケ

ニオン大学略史であって、本来ならば冒頭にもって来てしかるべきものであろう。何しろこの人をもってガンビアもケニオンもその歴史が開かれるのであるから。

しかし庄野氏は十分その事を承知の上で敢えてそれを排して、リスの走り回る町として書き出し、続いて郵便局の章へと移り、その後半でガンビアを開拓し、ケニオン大学を創立したチェイス氏を描いた壁画を郵便局に見出して極めて自然にその生涯と大学創立の経緯を簡潔に、巧みに、あたかも一人の隣人を紹介するような自然さですませてしまっているのであるが、それはつまりこういうことであらう。

庄野氏にとって「ガンビア滞在記」を書くことの意味は創立者フィランダー・チェイス氏の偉業を顕彰することにあるのではない。

そもそも留学の目的がアメリカの「田舎の小さな町へ行って、そこで暮らしたい。そうして、みんながどんな風に生活しているかをよく見たい。」¹⁷と考えている氏にとって、問題なのはガンビアという町で人々がどんな風に暮らしているのかということであって、ガンビアの開拓の歴史や大学創設の経緯等は関心外のつけたりすぎない。従ってガンビアの歴史や大学創設の経緯等については、町の由来・特色を語る上で最小限ぎりぎりに触れられればよいことであって決してそれ以上ではないのであり、チェイス氏についての既述も二章の後半に要約される程度で十分なのであろうと考えられる。

とすれば、学生を除くとガンビアの住人は約百人というから、氏の交際する人数はその半数として、約五十人。五十人という数字はこれは今日の感覚で言えば宇宙船地球号に乗っている人数の感覚で

とでもいったらよいであろうか。

しかも氏は一年間否応無しにその五十人の人達と暮らすことになったわけであるから、その時からその人々は運命共同体の一員であり、隣人となった。

とすればそこから先は自明であろう。作者としての好奇心は尽きることなく隣人たちの身許調べをするだろうし、またそのまなざしは隣人である故に限りなくやわらかにそそがれる筈であろう。

〈隣人〉の発見とその記録―この作のテーマはそれであり、以後の氏の文学の基調となったと断じてよいであろう。

次に既に紹介したように流石〈自然派〉の庄野氏も実際にガンビアに身を置いてみて改めてその人気のなさには啞然として、この淋しいところで果たして一年間過ごせるのだろうか、どうやって日を送ったものだろうと心細くならざるをえなかったと正直に告白しているのであるが、案ずるより生むが易し、そうはならず克服できた要因は何であつたのだろうか。

端的に言つてそれは親しくつきあえる友人や隣人が大勢できたからにはかならない。

この滞在記を読んで庄野氏夫妻が最も親しく交際したトップはミノ一家であり、次いでニコデム教授夫妻、三番目にジニイ、トムの学生たちであることがわかる。

ミノ夫妻には二十代の終り位の年令（正確に言えばミノは一九二七年生まれと『シェリー酒と楓の葉』〔78・11・15 文芸春秋〕にはあるので三十歳一歳にかけてである）、庄野氏は三十六歳から七歳にかけての年なので年令的に近かつたことがうちとけあう上で大きかつたかもしれない。交際が始まるとすぐ親密になつて

日に何度も行き来する仲になり、滞在記の後半はミノの就職活動の結果に一喜一憂する展開になるのだが、そこに見られる氏の姿勢はあだかも長兄がはらはらしながら末弟の身を案ずる姿に擬せられるであろう。言い換えればミノ一家とは極めて異例な濃密で肉親的な交流があつたとさえ認められる点で幸福であつたと言ふべきである。

ニコデム夫妻との交流も別の意味で〈異例〉というべきであろう。というのは夫妻共にポランド人で戦後アメリカに来て夫は数学を教えている教授（庄野氏は知合つてから教授に、もし私のことを知りたければあなたの知り合いの数学者にニコデムの法則ということを聞いてごらんと言われたという）であるが、「ケニオンのどの教授の家族ともつき合ひをしていなくて、孤立した生活」（二十二）を送つていて、特に教授は「頑なで交際嫌いだという評判」（同上）の変人だつたからである。

全学のパーティで一、二度話し、夫の言葉は聞き取れなかつたが、「お伽話に出て来る魔法使いのお婆さん」（同上）のようなニコデム夫人は絵を描くのが好きで家中の壁を絵の額で埋め尽くし、昔から「日本の美術を尊敬」（同上）していると云い、マイ・カーをもつていないと聞くといたく同情して、それは不便だ、私達も車がなかつたから本当に困つたし、あなた方の不自由さがよく分かる、今後はマウント・ヴァーノンへ買物に行く時は誘つてあげようと言つてくれて親切に声をかけてくれるようになり、交際が始まつた。

夫人は有言実行、実に親切でマウント・ヴァーノンへの車での送迎は勿論、菊見の頃には近在で有名なキングウッド公園に案内して

くれたり、インディアンの生活用品を収集したコシヨックトンの町の博物館見学やエリー湖のケリーズ島へ一泊旅行に誘ってくれたりなどの他、最もありがたかったのは、ジニイやトムやブルースというケニオンの気持のいい、優秀な学生を紹介してくれたことである。庄野氏はこれらの学生たちとすぐにうちとけて親しくなり、一緒に飲み、食べ、語り、テニスをし、ハイキングに出かけ、またクリスマス休暇には彼らの誘いでワシントンを見物し、六月からの期末の休みにはニューヨークの旅を楽しむなど二度にわたって若者たちとの旅の交歓を満喫して大いに若返ったのであつた。

ところで大学一の社交嫌いで教授会メンバーの誰とも交際のないニコデイルム夫妻が庄野夫妻と親密な交際を続けたのには如何なる事情があつたのであろうか。

具体的には指摘や説明がないのではつきりしたことは不明だが、私見によれば事実上ツマハジキになつてゐることについては社交上のルール破りにあるのではないかと思われる。

例えばニコデイルム夫人が庄野氏を某日のティーに招待したいと電話をするとあいにくその日は先約があつて都合が悪いとする、通常では別の日にと互いの都合を話し合つて決めるわけだが、夫人の場合はその日にこだわる。まず、先約の時間をずらせないとねばり、次いで招待者や出席のメンバーを尋ねるのだが、これは社交上の禁句であつて、決して口に出してはならない言葉であるが、夫人はそれを平然と口に出すからモメて嫌われるのである。¹⁸

また、パーティーでは政治や宗教の話題も避けるのが常識だがニコデイルム家の場合ではそれがないので激論を長時間闘わすことになつて白けてしまうのである。

更にある時には、招きを受けて庄野氏が行くと、ニコデイルム氏が熱を出して寝ていることがあつた。すると夫人は夫にかかりきりで来客は放りっぱなし、あちこちの病院へ電話して医師から流感だから心配はない、と言われても舞い上がつてしまつて聴く耳をもたないというありさま。

端的に言えば、ニコデイルム夫人はポーランドから来た新米である故に交際下手、社交下手なのであつて決して「人間嫌い」ではないのだということである。だから機会があれば交際したいと思つてゐる故に庄野氏に近づき、その間数々の失敗、迷惑はあつても、これまでの大学の教授諸公とは違って、庄野氏は容認し受け入れてくれたが故に益々交際を深めていったと言つてよいのではないであらうか。

要するに、自己中心的で自己を客観視出来ず、社会性を欠如した人間であるわけだが、そういう教授夫妻が庄野夫妻と交際を続けたのについては別にこう言つてもよいかもしれない。

それは単なる人づきあいのよさというようなものではあるまい。ニコデイルム夫妻のように高度な知識人でありながら、自制心のバランスを欠いているような人間を魅きつけ、交際を望むようにしむけるものが庄野夫妻にはあつたということである。

それを一言で言うことは難しいが、何か特別な知識や新しい思想というようなものではあるまい。作品からうかがえるものは、のびのびと育つた良識であり、かたよらずにバランスよく成長した平衡感覚であり、穏健妥当な判断である。

それらを総合したものとして氏の人格的マグネティズムがあり、「忘れえぬ人」、「ゆかしき人」たる所以があるのではないか。

庄野氏における他人との結びつきの秘密と言う問題は氏を論じる際の重要な課題の一つだが、ここでは結論だけ言えばその核にあるものはこの「忘れえぬ人」、「ゆかしき人」ということに尽きると言つてよいであろう。

そうではなくして、庄野氏の交友に見られる次のような結びつきがどうして現実でありうるものとして理解できるであろうか。

既に紹介した「イタリア風」のイタリア系アメリカ人アンジェリーニ氏とはガンビア滞在中に氏の住むニューヨークの自宅に招かれて再会するのだが、知合ったきっかけはその二年半程前に日本で東海道線の車内で通路を隔てた席で隣り合つて坐り、話をしたのと、もう一回上京したアンジェリーニ氏に呼び出されて東京のホテルで食事しただけのたった二回の偶然的な出会いしかなかったからであり、氏自身招かれることを負担に感じる程の間柄だったからである。

同じく既述の「ニュー・イングランドびいき」のインタースティン氏夫妻とはアメリカ行きの中で知り合つて初めての渡米故に率直に尋ね、相談した結果肝胆相照らす仲となつたわけで、帰国前にボストンで再会し、カナダ国境までの旅行に誘つてくれたというのも相手にそうさせてしまう氏の魅力の存在をヌキに語ることは無意味であろう。

また、作品は快調なテンポで進み、ガンビアでの人々の暮しが軽快に描かれてゆくのであるが、作品は決して〈明〉ばかりをえがいているのではない。

列車にはねられて死んだ友人の葬式にでかけてゆくという学生（二十五 ジャーマン・ミールズ）や、独身の若い教師と妻子の

ある学生のガスによるいたましい事故死（三十一 半旗）や、かねて入院中の散髪屋ジムの末子は妻と一歳半の子供とを残して死んだ（三十三 散髪屋ジム）というように、生のさなかの死という〈暗〉の部分も提示することによって人生の奥行きを示していることもつけ加えておきたい。

この作品については多くの評があるのだが、その中で最もすぐれたものを一つだけ選ぶとすればすぐれた英文学者であり同時に、エッセイストでもあつた福原麟太郎が「庄野潤三氏の『ガンビア滞在記』を読んで、アメリカの片隅の小さな大学町での日常生活が何の奇もなくただ日記のごとく書いてありながら、その記録の面白さにつくづく感心した」と指摘するところにあると思われる。

片隅の小さな町での、何の奇もない日常生活が詩人の目でとらえられ、書きとめられることによって記録の面白さが生まれ、生きていく人間と人生とがしっかりと定着される。

この作品を書くことによつて得られたそういう認識と自信は氏の以後の作家人生の中にしつかり織り込まれてその方向を見定めていったことは確かである。例えば〈記録の面白さ〉を手中にした氏にとつて、もはや長篇を書く不安・悩みなどは恐らくなくなつていたに違いない。

七

昭和三十四（一九五九）年に発表された他の小説としてはまず「南部の旅」（昭34・1「オール読物」単・全6収）があり、これは三十三年の三月三十日から六日間、南部のニューオーリンズをバ

スで旅行した時のもので、作中最も緊張するのはメンフィスで「ホワイト・ウェイティング・ルーム」と待合室に書かれていた時で、始めての経験にギョッとすることがないのでホッとする経緯を描くが、食事をして幸い格別のことがないのでホッとする経緯を描くが、これは明らかにガンビアとは別のもう一つのアメリカである。

「父母の国」(昭34・3「婦人之友」 単・全8収)はケネオン大学に学んでいたハワイ出身の日系人学生、トムとロドニー―その親孝行ぶり、兄弟への感謝と思いやりの深さ、を的確に描いて印象的である。

これに対して「話し方研究会」(昭34・4「別冊小説新潮」 単収・全未収)はユーモア小説で、庄野氏がアメリカ滞在中に知り合った男からトーストマスターズ(宴会の司会者の意)・クラブの「話し方研究会」の活動状況を日本に帰国したらみんなに紹介してほしいと頼まれた経緯をユーモラスに描き、「ニューイングランドびいき」(昭34・9「婦人画報」 単・全3収)については本稿前半で既に紹介しているので簡略にとどめるが、庄野夫妻が渡米の際に船中で知り合ったボストン生まれのウィンタースティン一家と忽ち旧知の仲となる。氏が自ら海軍の牧師と名乗るまで庄野氏はつきりハーバード大卒業の大学教授と思いこんでいた程(事実、日本にいる間、二年間早大で宗教学を教えていた)の博学多識でどんな相談にも応じてくれ、さまざまな事を教えてもらった。高校生をかしらに二男一女があり、長男のプレスコットはいつもラテン語の本を手離さない末頼もしい秀才タイプであった。チップの心配を始めとして、サンフランシスコに着くと大量の荷物の移動で疲れているにもかかわらず、わざわざ庄野夫妻のホテルに電話をよこして海軍

のクラブの食堂に呼んでご馳走し、夫妻の乏しい旅費から少しでも食費をうかせるようにと細やかな気配りをしてくれた。

その後も文通を続け、帰国前六月九日にはボストンで再会し、カナダ国境までのドライブ旅行に誘ってくれた次第を記す。誠に人の好い、無類の親切心をもった一家である。

「静かな町」(昭34・10「別冊小説新潮」 単・全4収)は前出の「南部の旅」の続きで、ホテルが一つしかない小さな町で食事の前に一杯やりたいのでバーに入ると話しかけて来たのでシェリフでしかも全く警官らしくない、のんびえ男の長つ尻で庄野夫人から尻を叩かれて退去する次第を描いているが、ここには帰宅する前に飲み屋に寄らないとおさまらず、寄れば必ずハシゴ酒になるタイプが巧みに描かれる。「蟹」(昭34・11「群像」 単・全3収)は小六をかしらに三人の子をもつ中年の会社員が四日間の夏の休暇をとって海水浴に行った日々をスケッチしたもの。

八

以上がこの年発表した小説で、これ以外のエッセイ類としては次のものがある。

昭34・1・13	自分の羽根	「産経新聞」
3	若き芥川賞作家たち房総へゆく	「旅」
3	ソイ(又はソヤ)的人間	「酒」
3・23	カナダ・チームを送る	「読売新聞夕刊」
4	自由自在な人	

「鷗外全集第二卷月報」(筑摩書房版)

- 5 ある前書(「一言」のコラムで) 「群像」
- 6 三人のディレクター(「作家の眼でみたラジオとテレビ」の特集で) 「放送朝日」61号
- 11 英語は通じるか―「学校英語」を馬鹿にするな
かれ― 「文芸春秋」
- 11・20 アメリカの田舎 「調査情報」15号

これらのエッセイの中で、最も注目すべきものは年頭に発表した「自分の羽根」であろう。そこで氏は自らの書くものについて次のように断言する。

私は自分の経験したことだけを書きたいと思う。徹底的にそうしたいと考える。但し、この経験は直接私がしたことだけを指すのではなくて、人から聞いたことでも、何かで読んだことでも、それが私の生活感情に強くふれ、自分にとって痛切に感じられることは、私の経験の中に含める。

私は作品を書くのにそれ以外の何物にもよることを欲しない。つまり私は自分の前に飛んで来る羽根だけを打ち返したい。私の羽根でないものは、打たない。私にとって何でもないことは、他の人にとって大事であるうと、私にはどうでもいいことである。人は人、私は私という自覚を常にはつきりと持ちたい。

これは驚くべき大胆な、確信に満ちた自己限定宣言である。自己

の書くべき内容を自らが経験したことだけに限定する(経験には直接体験のみならず、間接体験も含まれる)というのは、一步間違えば豊饒な文学の緑野を自ら締め出すことにもなりかねない筈で、自分で自分の首を絞める自殺行為とも言えるからである。

自らの文学に対するこのように重大な決定、あるいは決意の表明がなされる背景には言うまでもなく、この時期既に『ガンビア滞在記』(昭34・3・5 中央公論社)を脱稿して、間もなく刊行されるのを待つばかりであり、その「あとがき」には既に次のように記していた。

私は滞在記という名前をつけたが、考えてみると私たちはみなこの世の中に滞在しているわけである。自分の書くものも願わくばいつも滞在記のようなものでありたい。

このような認識をもった作家が、以後「愛の不毛とか挫折とか限界状況とか疎外」(小島信夫との対談「文学を求めて」昭40・12「新潮」というような「流行の観念」(同上)で色づけした小説を書かないのは当然であろう。

「自分の羽根」での〈文学的決意の宣言〉は畢竟、「ガンビア滞在記」執筆の過程で明瞭に自覚され、確信されるに至った自己の文学とその方法にすっかり裏付けられたゆるぎないものであり、道は既に定まっていたのである。

「ザボンの花」(昭31・7・20 近代生活社)のヒロイン千枝を最後として以後彼女のような詩人的魅力をふりまく女性は庄野文学の世界から姿を消す。それは恐らく右の主張と正確に見合うもので

あろうが、その点で庄野文学にある断念、一つの見切りがあった事は確かである。²¹

注

- 1 小島信夫「文芸時評」(昭33・11・24「週刊読書人」)。
- 2 臼井吉見「文芸時評」(昭33・11・18「朝日新聞」)。山本健吉「文芸時評」(昭33・11・21「読売新聞」)。
- 3 坂西志保「アジアからの新しい星」(昭33・1「文芸春秋」)。
- 4 阪田寛夫『庄野潤三ノート』(昭50・5・5 冬樹社)。
- 5 庄野潤三「要約された言葉」(昭43・6「文学界」 単・全未収)。
- 6 庄野潤三『ガンビアの春』(昭55・4・30 河出書房新社)。
256頁 参照。
- 7 庄野潤三「アメリカの田舎」(昭34・11・20「調査情報」 15号 単・全未収)。
- 8 「インタビュー」「アメリカから帰った庄野潤三氏」(昭33・8・14「産経時事」 単・全未収)。
- 9 庄野潤三『シェリー酒と楓の葉』(昭53・11・15 文芸春秋)。
- 10 庄野潤三「あとがき」(昭53・11・15『シェリー酒と楓の葉』 文芸春秋)。
- 11 坂西志保「アジアからの新しい星」(同前)。
- 12 庄野潤三「ニューイングランドびいき」(昭34・9「婦人画報」 単・全3収)。
- 13 注12に同じ。
- 14 注8に同じ。
- 15 注4に同じ。
- 16 川嶋至「『第三の新人』の留学」(昭59・12「東京工業大学比較文化雑誌」)。
- 17 注7に同じ。
- 18 庄野潤三「ヨークシャーの茶碗」(『シェリー酒と楓の葉』所収 前出)。
- 19 福原麟太郎「私の古典」I「克蘭フォード」(昭34・6・29「週刊文春」)。
- 20 『ガンビアの春』(昭55・4・30 河出書房新社)によれば、その後彼「プレスコットはハーバード大学に進んだという。(二七五頁)。
- 21 詳しくは拙稿「庄野潤三論(二)——「ザボンの花」を中心に——」(昭59・6「言語と文芸」 95号 桜楓社) 参照。